

Title	創造としての語ることと聴くことー病いの子どもとともに生きる母の体験をとおしてー
Author(s)	中西, チヨキ
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/70707">https://doi.org/10.18910/70707</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 論文内容の要旨

氏 名 ( 中西 チヨキ )	
論文題名	創造としての語ることと聴くこと —病いの子どもとともに生きる母の体験をとおして—
<p><b>論文内容の要旨</b></p> <p>本論文の目的は、語るということと聴くということとはどういうことかを明らかにすることである。それを明らかにするために、インタビューに応じてくれた病いの子どもとともに生きる母Cさんの体験をとおして検討する。「語ること」の動機になったのが、わたし自身の語る体験であった。或るとき、わたしは、自分の体験をTAさんに聴いてもらっていた。とつぜん〈らくになりたい〉ということば口を衝いてでた。その瞬間「そうだ、わたしはらくになりたいかったんだ」と思った。ほっと安堵のため息がでて、こころが晴れ、自由な感じがした。後日、学生と実習指導者のあいだで交わされていることばの意味が、まるで絵に描いたように鮮やかに生きいきと浮かび上がって見えた。この現象にわたしは驚いた。この場面でわたしが不思議に思ったのは、とつぜん口を衝いてでた〈らくになりたい〉ということば、その瞬間にあふれた涙である。「まるで絵に描いたように鮮やかに生きいきと浮かび上がって見えた」ことである。これはなんなのか、と。それが、語るとはどういうことか、を考えるようになったいきさつである。</p> <p>聴くということについて考える動機となったのは、実習現場で起こった或る出来事に端を発している。患者さんの様態が変わって、学生の受け持ちを変更することになった。患者さんを思いやる気持ちと、受け持ちの変更で、学生はいまにも泣きそうな顔をしていた。わたしが、「あなたはどう思っているの」というと、学生は急に泣きだした。学生は実習記録に以下のように記していた。「いまは未熟でも、いつか患者さんが生と死のはざままで苦しみ、悩まれているときでも、援助できるようになりたいです。いろんな経験をし、その場から逃げることなく、がんばっていきたいです。今度は、自分自身の思いと行動を、存在を否定しようとするものを克服すればいいですね」と。とつぜん、現れる絵に描いたような生き生きとした現象や、患者さんの苦しみを想って、看護者として学生として、成長したいと頑張る学生に、わたしは驚嘆した。わたしは語ることのなにによってこのような現象が起こるのか、不思議に思った。それが本論文の動機であった。</p> <p><b>【本論文の構成】</b></p> <p>本文は、六章で構成されている。序章は本論の導入として、本研究の目的と動機、意義、研究方法を示す。第一章は、語ること聴くことに向けて、病むことと出会うこととしての看護について述べた。第二章は、語る者の体験を記述した。第三章は、聴く者としてのわたしの体験を記述した。第四章は、この語る体験と聴く体験が、なにを語ろうとしたのかを考察した。第五章は語ることと聴くこととは、看護とどのようにかかわるのか考えてみた。補章は、第一章から第五章までの病いの子どもとともに生きる母の体験の話とはまったく異なった、「Cさん自身についての語り」である。</p> <p><b>【各章の概要】</b></p> <p>「序章 語る者と聴く者のあるがままの体験へ」。ここでは、わたしの語る体験と聴く体験を記述した。この体験をメルロ＝ポンティの言語論、哲学、身体論を参照して見てみた。この語る体験、聴く体験が研究動機だった。目的は、そこから生まれるすばらしい現象がどのように現れるかを明らかにすることだった。語ること聴くことから、新しいことばが生まれる、そこに研究の意義はあった。それはどういうことかを追求するための、語る聴くことは、「なに」をだけではなく、〈どのように〉かが、わたしには重要だった。対話ではことばだけではなく、声の調子やいい方や顔の表情などの音声の身体的所作は、その意味をより深く感じとらせるからである。そこにわたしは強くひかれ、注目してきた。研究方法は、語る人の体験が表されるインタビューを採用した。研究参加者は、難病の子どもを介護する母Cさんである。</p> <p>「第一章 看護と語ること聴くことに向けて」。1. 病むこと 2. 出会うこととしての看護が主題である。病むこととはどういう事態か、病者はどのような状況におかれているのか、それをヴァイツゼッカーの転機と神谷ののり越えに依拠して考えた。病いは苦しみの受け手として在る。「生命とは一つに過程ではなく《受苦的》にこうむるものである。2. 出会うこととしての看護について」。ベナール＝ベルの、「病気をなおし、患者に安らぎをあたえるためには看護師が症状の意味を、いまおかれている状況や関心と関連づけて理解すること」という考えは、看護にお</p>	

いては不可欠である。また、わたしが注目するのは、すべての病人の生命力の消耗が最小限になるように〈適切〉にである。なにごとにもそのときその場によって異なるものだからである。病者の場合はとくに。

「第二章 語るとはどういうことか」。「1. 苦しみを語る」の苦しみとは、発病当初の子どもの厳しい状況をいう。呼吸が苦しく、肩で息をする子ども見て、母Cさんは（以後、母Cさん、あるいはCさんと呼ぶ）〈頭がおかしくなる〉といった。また、子どもが先に逝ったときが一番つらいというCさんは、〈代われるもんなら代わってやりたい〉といった。それらは、Cさんの、かけがえのないいのちが失われそうになったときに発せられたことばであった。

Cさんは、「話すことで、子どもが病気になったことで、聴いてもらうことで、自分がこう在りたいと願う、指針・道を方向付けられた」といった。その道とは、「もっと人生には深いものがある」「美しい花を見て、美しく咲かせるためには、人の手や自然の恵み受けながら、いま咲いている」というCさんの道であった。そのようなことが起こったのは、Cさんとわたしが、タイミングよくめぐり合ったことにあった、とCさんはいった。

「第三章 聴くとはどういうことか」。ここでは、Cさんのことばを聴いている、わたし自身の聴き方を検討した。Cさんの子どもが「みな負担になって生きてるのいや」といったとき、わたしは動揺した。わたしは、Cさんのことばを受け止められなかった。そのときわたしは、子どものつらさを哀しむCさんを受けとめられない自分を知った。子どものつらさと母Cさんの哀しさを感じて、Cさんへの理解が浅かったことを思い知った。そのとき、わたしは子どもと母Cさんの苦しみと深い哀しみの深さがあらためて感じられた。

人の本質は苦しみのなかにある、というわたしのことばに、「でもね」と、Cさんはいった。わたしは驚き、あわてふためいた。しどろもどろになって、自分のいったことをとりつくろうとしていた。その自分に気づいていたとき、あらためて、Cさんに向かい合った。そのあと、Cさんはかつてないほど多く語り、新しい体験を話してくれた。

「第四章 創造としての語ること聴くこと」。ここでは、第二章におけるCさんのことば、第三章におけるCさんのことばを聴くわたしのことばについて検討した。呼吸が苦しくて肩で息をする子どもの姿を見て、Cさんは「頭がおかしくなる」といった。このことばをわたしは創造ととらえた。呼吸が苦しくて「ハーッと深く息をする動作や、（～ですよ）、と訴えるような所作は、Cさんの苦しみの深さや重さをより強く感じさせた。所作はCさんの思想の源泉、Cさんの根本的な存在のし方」を表していた。Cさんの話を聴いているとき、わたしは〈オヤッ〉とか〈エッなに？〉とかいう感覚を感じる。そのときわたしは疑問をもち、「どういうことですか」、と問いかけた。この問いに応えることによって、Cさんは、〈子どもが何年生きられるか保証がない〉という現実を知ることになった。そこから、「でも、親にして見れば、いまのいま、子どものやろうとしていることを手助けしてあげなければならない」、ということばが現れた。このことばは、Cさんが未来を切り拓く、新たな世界への幕開けのように見えた。

「第五章 語ることと聴くことと看護」。ウィーデンバックは、看護の本質を〈患者援助の技術〉とし、〈援助の技術〉と考えられる臨床の看護に重きをおく。看護師の専門職業人としての位置づけを明らかにし、そのサービスを《技術》として確立し、その意味づけを行う。それには、患者の〈援助へのニード〉、看護師の思考・感情が、看護を成り立たせるかどうか決定づける。看護の目的は、その人がおかれている状態や状況や周囲の環境などから、自分が要請されていることにうまく反応できるように促すこと〔……〕である。その実践には、患者おかれている状態や状況を、患者がどう理解するか、すなわち、どう〈知覚〉するかが重要である。患者が、どう〈知覚〉し、そのときどのような体験をしたのかを問うことが、看護師に求められることになる。

「補章 自分自身についてのCさんの語り」。開ロ一番、Cさんは自分のことをつぎのように語ってくれた。「あたしおいて母が再婚した、だからわたしは捨てられた子だと悪い考えをもっていた。でも、病気のお母さんを引き取って亡くなるまで面倒を看た。だからそれは、「お母さんが自分のそばに来てくれたのは、自分が持っているしこりを取り除くためだった」、とCさんはいった。「お母さんとして生きる道、精いっぱい生きただなあ、とそのときになってはじめて思えたんですよ」と。子どものころ、Cさんには〈いつもいい子でいなければいけないような感じ〉があった。〈一番残念なのは、自分が子どもらしくない子どもだったこと〉だった。Cさんは、中学時代から小学時代、戦死したお父さんの話、一番残念なのは、自分が子どもらしくない子どもだったこと」など、語ってくれた。それはCさんの生い立ちともいえる話であった。

結論：Cさんの〈頭がおかしくなる〉ということばは、口から飛び出すよう現れた。Cさんの話を聴いているとき、Cさんの話を聴いているわたしの方へ向きを変える必要があった。苦しみと歎び、この両者一つとして見たとき、それを生きてきたCさんの全体が見えてきた気がした。語ることばは、意味的意図が発生状態で見いだせることばである。Cさんの語るという行為のなかから〈頭がおかしくなるということばが現れる〉、それをわたしは、ことばの創造として捉えた。

対話は、ことばだけではなく、音声や身体的所作は意味の深さや揺がりをよりよく感じさせる。語る聴く行為はことばを伝達するだけではない。自分の思考を完成する。またあらたな世界を切り拓く。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 中西チヨキ )			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	堀江剛
	副 査	大阪大学 教授	入江幸男
	副 査	大阪大学 名誉教授	浜渦辰二
	副 査	首都大学東京 教授	西村ユミ
<b>論文審査の結果の要旨</b>			
以下、本文別紙			

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 創造としての語ることと聴くこと  
——病いの子どもとともに生きる母の体験をとおして——

学位申請者 中西チヨキ

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 堀江剛  
副査 大阪大学教授 入江幸男  
副査 大阪大学名誉教授 浜渦辰二  
副査 首都大学東京教授 西村ユミ

【論文内容の要旨】

本論文は「語ること・聴くこと」の創造性について、難病の子を抱える母親のインタビューを聴き手である自らの体験も絡めながら、現象学、生命哲学、現象学的精神医学、看護論などを手がかりにしつつ、分析・考察した論考である。構成は、序章、1～4章、補章と結論から成り、謝辞と参考文献一覧を付す。全体の分量はA4判137ページ、400字詰め原稿用紙に換算して、約480枚に相当する。

序章「語る者と聴く者があるがままの体験」では、看護職として実践してきた申請者の動機とともに、方法論上の視点としてのメルロ＝ポンティの言語論、アーサー・W・クラインマン（臨床人類学）、アーサー・フランク（医療社会学）などの先行研究、質的研究としてのインタビュー法と倫理的配慮に言及している。

第1章「看護と語ることと聴くことに向けて」では、ヴィクトール・フォン・ヴァイツゼッカーの「転機」の概念、及び神谷恵美子の「乗り越え」という概念を手がかりに「病むこと＝受苦的に蒙ること」とその変容について、またそこに「出会い」として関わる看護という捉え方が提示される。

第2章「語るとはどういうことか」及び第3章「聴くとはどういうことか」では、インタビューで得られた言説に即した分析が、語る・聴く双方の側面から試みられる。記述の方法は、語りにおける幾つかのエピソードを重ねる方法を採用し、対話の中に現れた具体的な言葉遣いに着目する形で、現象学的・実存論的な「体験の意味」を浮かび上がらせている。

第4章「創造としての語ることと聴くこと」では、分析を情動的な所作を含めた「ことばの創造」という観点によって意義づけている。加えて、それを語り手・聴き手の「あいだ」で生み出されるという精神病理学（木村敏）の視点と関連づける試みも行っている。

第5章では、こうした「語ること・聴くこと」についての哲学的な考察を踏まえた上で、それを看護論における「援助へのニード」（ウィーデンバック）という枠組みに照らしつつ、ケアの専門的実践としてどのような営みであるかを評価する。

補章「自分自身についてのCさんの語り」では、インタビューでの「語り」そのものを収録する。

最後に、語ることと聴くことを「新たな世界を見せる」創造的な営みとして結論づける。

#### 【論文審査の結果の要旨】

公開審査会では、研究の独創性ないし意義として次の点が挙げられた。1) 従来の研究では、語ること・聴くことのいずれか片方に重点を置いた考察が主であるのに対して、本研究はその両面に等しく着目し、両者の深い相互作用の姿を析出することに成功している。2) インタビュアーである申請者自身が「聴くこと」においていかなる経験をしているのかを、極めて詳細に分析している。とりわけ、語ること・聴くことが、単なるやりとり経過ではなく「どのように生まれていったのか」を具体的に示している。3) 「二人称の死」（柳田邦男）の手前にある言わば〈二人称の病い〉を考察した論考として評価できる。4) メルロ＝ポンティなどの哲学上のアイデアを、単に理解して臨床的な考察に応用するのではなく、申請者自身の経験に基づく質的分析の手がかりとして生かし、哲学と人間の経験との間に新たな道筋を与えている。

他方、次のような問題点が指摘された。1) 語ること・聴くことに関して、それをどのような場面（例えば援助や看護といった特殊な場面か、それとも一般的な場面か）で扱うのが曖昧である。2) 研究の独自性と先行研究に関して、両者の関係についての説明が不十分なため、結論部において本研究がどこに着地したのが不鮮明になっている。3) 「創造」という概念の説明が不十分で、この概念を使って、語ること・聴くことを捉えることのメリットについて言及していない。4) テーマ（語ること・聴くこと）の一般性に対して、それが看護実践に引き付けられており、一貫性の保持という点で課題が残されている。

しかし、これらの疑問も本論文の本質的な価値を損なうものではなく、論文審査担当者は、本論文が独創性に富んだ質的・臨床哲学的研究として評価に値するという点で、意見が一致した。よって、本論文を博士（学術）の学位にふさわしいものと認定する。